



明けましておめでとうございます

令和
三年

明けましておめでとうございます。令和3年の新春を穏やかに迎えのことと心からお喜び申し上げます。市民の皆さまには、日ごろより市政に対してご理解とご協力を賜り、厚くお礼申し上げます。

昨年を振り返りますと、年の始めから新型コロナウイルス感染症が全国に拡大し、4月から5月にかけて緊急事態宣言が発出されるなど、それまでの生活様式が一変いたしました。市民の皆さまにもご不自由な生活であったことと思いますが、ワクチン開発も進み、感染症対策も講じられ、早く収束することを祈願しております。

さて、昨年の市の取り組みといたしましては、新型コロナウイルス感染症対策に係る各種支援事業の他、産業の振興・雇用の拡大を図ることを目的とした企業立地支援制度の創設や、2050年までに本市からの二酸化炭素排出量実質ゼロを目指す「ゼロカーボンシティ」を千葉県内自治体で初めて宣言するなど、未来を見据えた取

り組みを実施してまいりました。

また、本須賀海水浴場について、国際環境認証「ブルーフラッグ」の認証を本年も継続取得するよう対応していますので、大勢の観光客に足を運んでもらえるよう、万全の準備を整えてまいります。

そして、本市もホストタウンとして参画する「東京2020オリンピック・パラリンピック」においても本年夏に改めて開催される予定です。市としても大会の成功に向け、余念なく準備を進め、本市に活気と賑わいが戻ることを切に願います。

市政におきましては、行政運営の柱となる「第2次山武市総合計画」が3年目を迎えます。合併自治体に対する財政特例措置が終了し、厳しい財政状況が見込まれますが、効率的かつ効果的な行財政運営により、計画に基づいた災害対策や福祉・医療の充実、教育環境の整備など、人口減少対策に重点を置いたさまざまな施策を展開



山武市長

松下 浩明

してまいります。

市民の皆さまとまちづくりの思いを共有しながら、誰もが安心して暮らすことのできる活気と魅力にあふれるまちを目指してまいりますので、より一層のご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

皆さまのご健勝とご多幸を心よりお祈り申し上げます。年頭のあいさつといたします。

明けましておめでとうございます。

市民の皆さまにおかれましては、健やかに新年をお迎えのことと心からお喜び申し上げます。日ごろより、市政運営ならびに議会活動に対し、深いご理解とご協力を賜り厚くお礼申し上げます。

また、新型コロナウイルス感染症の拡大が進む中、日々医療現場等の最前線でご尽力いただいている医療従事者の皆さまをはじめとする関係者の方々に心から敬意を表するとともに、一日も早い事態の収束を願っております。

さて、世界的に猛威を奮っている新型コロナウイルスは、いまだ感染収束の兆しは見えておらず、かつてない時代の転換期を迎え、「新しい生活様式」の推進などにより市民の意識や価値観も変化を余儀なくされています。

本市は昨年より、新型コロナウイルス感染症緊急経済対策に係る各種支援事業を展開しております。

ますが、市民の安全・安心な生活を守るとともに、経済への打撃を最小限に食い止め、より良い暮らしを送ることができるよう、皆さまと知恵を出し合い、現状を乗り切っていくことが求められています。市議会といたしましても、市とさらなる情報共有を進めるとともに、迅速かつ的確な施策が実現できるよう努めてまいります。

また、近年、人口減少や高齢化の進展で先行きに悲観的な論調が広がる中、経済成長の鍵は技術革新や発想の転換にあると言われていきます。

そして、地域資源を活かした市民協働によるまちづくりの推進は、地域活性化への重要な役割を担っています。

本市においても、少子高齢化が進み、本格的な人口減少社会を迎える中、市民の皆さまからの多様な意見に耳を傾け、市民、行政、議会が一体となり、皆さまが「住

んで良かった」といえるまちづくりを推進するため、二元代表制の一翼を担う議会としての役割を十分果たせるよう、全議員が一丸となり、山武市の豊かな市政運営の実現と市勢の発展に尽くしてまいります。

結びに、皆さまのご健勝とご多幸を心からお祈りいたしますとともに、本年も山武市議会になお一層のご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。新年のごあいさつといたします。

山武市議会議員

大川 義男



令和3年山武市長・市議会議員

新年のごあいさつ

●市民記者が聞く

山武市成東観光苺組合長

中村 隆幸 さん

毎年いちご狩りのシーズンになると、遠方からもたくさんのお客さまが訪れる山武のいちご屋さんの数々。一度でも食べたことのある方は「やっぱり山武のいちごはおいしい！」と声を揃えます。

多くのリピーターさんを取りこにする山武のいちごは、どのようにしてつくられているのか、組合長の中村隆幸さんにお話を伺いました。



中村さん(順子のいちご園)

合言葉は

「日本」おいしいいちごを」

病気にさせない苗づくり

いちご狩りのシーズンが終わりを迎えるGW明け、「いちご屋さん」は休みが長くていいねえ。とよく言われます」と中村さんは笑いながらおっしゃっていました。が…….でもなんとなんとこのときから既にいちご屋さんたちは来シーズンの準備を始めています。

夏までの数カ月にあぶ苗づくりをスタートさせ、決して病気にさせないようにと細心の注意を払って苗を育てるそうです。ひと株の病気で全滅する可能性もあります。苗の育成は、少しでもリスクを感じたときは、破棄せざるを得ず、毎年1割程度多めにつくっても余ることは決してありません。

「必ず自分の目の行き届く範囲で管理を徹底したいので、大きすぎず小さすぎず、大型ハウス17棟、今の規模がちょうど良いです」と話します。中村さんのハウスの中は、その言葉を裏付けるように足を踏み入れた瞬間に整然とした空気がとても印象的でした。

土づくりが大切

お盆が明けたころには、堆肥づくりやハウスの準備と並行して、いちごづくりの要、土づくりが始まります。

成東観光苺組合が発足した1983年当時の合言葉は「日本一おいしいいちごをつくらう」だったそうです。仲間同士情報交換をし、ときには「うちでおいしいいちごができた!食べてみるか」と互いに切磋琢磨してきたそうです。そんななか、組合の研修で訪れた愛知で『地力(その土地の農作物を育てる力)』を上げることがいかに重要か再確認。中村さんは、毎年オリジナルの堆肥をつくり、通常よりもたくさん使用して土づくりをします。苗の定植は、お彼岸ごろから始まり10月まで続くそうです。

取材日、ハウスの中にはいくつかわい花が咲き始めていた苗がありました。あと数週間で赤みを帯びてくるでしょうと説明してくださいました。

山武市内では、早いいちご屋さん



は11月中に直売が始まり、年明けにはいちご狩りも始まる、というのがここ数年の流れです。

お客さんの顔が浮かぶいちご

「山武市のいちご屋の強みは、直売所といちご狩りに来るお客さんの反応が直接感じられること」と中村さんはおっしゃいます。

苦手な食べられませんかと言っていた方が「山武のいちごは食べられました」と言ってくれることや、一口吸ったいちごを口から離さない赤ちゃんなど、嘘のない子どもものリアクションを目の前で見られることは喜びの瞬間です。「見えない部分の頑張りが評価されたときこそつくる喜びを感じますね」と中村さん。宅配便の山武のいちごは、「完熟を味わっていただくために厳選していますので、お時間をいただくことがあります」。また、今年は直接足を運んでくださる方も楽しめるように、「専門家の監修のもと、人数制限や摘みとりと食べる場所を分けるなど、コロナ対策に万全を期してお客さまを迎える準備をしています。直売はもちろん、いちご狩りにも安心していらしてください」